

遠い時間

hikali



.....

プチッ

アッ、私。そう。明日、例の場所で。うん。受渡し。

それじゃあ。

.....プチッ

夢を見た。

輪郭が明瞭な夢で、その危機感、その感覚が、鼓動となって残っていた。

目を開けて、緊張で硬直した手を確認する。

僅かに頭を振らせて、天井の綿埃を眺める。

ようやく自分の居場所を知り、

私は溜め息しか呟けない自分を見ていた。

数十分の穏やかな昼の日差しの照射を、時間毎に傾いていく電車の手すりの影をぼんやりと見つめながら受けていた私は、乗り継ぎ駅に着いた事を知らされて突然の様に我に返った。

――アリさんが、ターくんに教えだちゅう……

――そう、アリさんが？

平日の午後。昼食を終え、のんびりとした人達がちらほらとこの車両には乗っていた。

落ち着いた声の車内アナウンスが乗り継ぎの電車の時刻を告げ、車両が柔らかな減速で慣性力を落としていく。私はゆっくりと遠出用のナップサックを担ぎ上げて、ドアの前に立つ。

郷愁と言ってしまうには、その見慣れた電車の窓枠は洗練されたアルミニウム合金で味気がない。しかし、硬質のガラス面の向こう側には、それを感じさせる風景が広がっていた。

11年住んだ街である。その生活圏に戻ったという感覚は私に想像以上の感激をもたらした。

帰って来た。

そういう思いが沸き上がってくる。やって来て良かったと素直に感じる。10年ぶりの光景である。10年の時の重みが身体の中で肺をたわませ、手すりを握った左腕を震わせ、脳の片隅に心地のよい、ぼんやりとした数え切れない思い出の残りカスを、香煙の曇りの中で散る線香花火の火花の様に霧散させた。

やがてドアが開き、私はホームに出る。私の浮かれた気分と対照的に発車のベルと閑散としたホームが静かな昼の空気の中に漂っていた。

ホームのコンクリートが列車の到着の振動を吸収しながら僅かに揺れ、そのざらついた表面が騒がしいブレーキ音をじんわりと吸収した。ため息の様な鋭い音が全ての車両から一斉に吐き出され、ドアが開く。これまでの遠路の走行を感じさせない強靱な機能美をそのくすんだ塗装に潜ませ、列車は私を急かす。

ゆっくりと高くなっていく列車のモーター音を足で感じながら、私は扉の向こうの景色に釘付けになった。様々に流れ行くオブジェの一つ一つが私の記憶と合致していき、私はその度に感激に吞まれる。

見たことのある煙突、河、グランド。

駅を一つ過ぎる毎に、合致する物が加速度的に多くなり、やがて、合致の対象が風景になる。すぐに風景が地理的感覚に変わり、そこに数え切れない思い出、印象、その他全ての記憶が重なり合い、カオスの、夢幻的なドロドロとした掴みようなない空間的感覚を私に呼び起こしていく。

思わず、手すりを握る手に力が入った。

乗り継いだ電車が、その莫大な質量を全く感じさせないなめらかさでホームに滑り込んでいく。刀身を納める鞘の様に、高架駅は車両を呑み込み、鉄臭い空気音を吐き出して列車は止まった。

階段を降り、狭い廊下を抜けると、すぐ改札で、切符を自動改札に通す前に駅前が覗ける。

私はその小さな、コンクリートの枠の中の光景に少々驚いた。母づてに、前々から計画されていたモノレールが通っていた事、私と家族が住んでいたマンションが全面改修され煉瓦ブロック張りになったこと、新たなスケートリンクができそれに伴って駅前にデパートが出来た事を聞いていた。

その僅かに覗ける新品ピカピカの光景を見て初めて、私は駅の中の黄と黒の工事中の看板と、張りつけられた一畳大のベニア板の連なりの意味を肌から直に感じる事が出来始めた。

脚が速くなる。

歩幅が大きくなる。

ボタンと開く自動改札を抜けて、日の光を感じると目の前の光景が身体に染み込んでくる。左手の駅ビルは空き地であった所、右手のロータリの真ん中にある公衆便所は見覚えがある。記憶の中の光景との格差を慎重に重ねると、全てが自分の街に戻っていく。

（あの通りの先がスーパーで、右手を真っ直ぐに延びる道には大きな病院がある。）

地図的な街の眺め方ではない。風景と思い出と印象の混ざり合ったカオス的な地図である。感覚と言っても間違えはない。それが自分の頭の中で次々と連鎖的に鮮明に蘇ってくる。

（あれか）

感心が、瞬間の間をおいて奇妙な形の驚愕に変わる。

それは余りにも洗練された異物である。アイスホッケーのチームの本拠地になっているスケートリンク。駅前に堂々と、新手のコンサートホールの様に建っている。

それを見ている私の感覚の感触が、私の記憶と重なった。

記憶の混乱。俗にデジャ・ヴュと言われる現象だと気付いた。

私は古そうな、その記憶と共に、グレイとシルバーの建物を見つめる。

三日前の深夜放送。画像をしっかりと記憶しているわけではないが名前はここだった。アイスホッケーブームとでも言える本当に局地的な盛り上がりの中心地である筈の場所だ。私をこの街に戻らせる衝動の種になったリンクだ。私という部屋の渴き切った畳に染み込んだ灯油かガソリンかに火花を散らしたのだ。

それが、奇妙な関連性を持って私の中で既視感として帰結した。

（それで、私はこの街に来たのか）

訳は全く分からない。しかし、得心がいった。

ガソリンの正体を知った気分なのである。

ふと、ソースの匂いに気付いた。的屋がタコ焼きを売っている。それが十数年前の光景と全く変わりがなく、また、スケートリンクに馴染んだ。匂いだけをタダで楽しみ、私はデジャ・ヴュの鮮烈な余韻から離れた。

私はしばしば明瞭で、印象の強い夢を見る。両目とも1.5の視力で見える私の現実よりくっきりと、そして、自分が死に掛けた交通事故よりも印象の強い夢である。大抵は他愛無いテレビの画面から飛びだして来た様な夢で、目を覚ました後にその余韻だけを楽しんだが、時に否定できないリアルさを持って何処からか、やって来る夢も少なからずあった。普通はすぐに忘れてしまい、その破片すら残らないのだが、時として唐突に現実の世界でその夢の断片に出会う。

いわゆるデジャ・ヴュである。

夢の不思議さは多くの人が語る通りで、大抵は睡眠中の脳による記憶の整理、イメージの整理として語られる。ベンゼンの分子構造の解明に一役買った尻尾をくわえた蛇の夢は有名で、他の様々な著名人が夢から着想を得た。

予知夢と呼ばれる夢も、夢の不思議さの一つとして語られる。今回の遠出も、実はそういった予知夢的な夢の一枚の瞬間に強く惹かれた所から始まったのだ。

その為に、生徒を置いて一人中国に飛んでいった教授の残した課題そっちのけで、一日潰すつもりで来たのだから、我ながらいい度胸をしている。

古いマンションの二階のベランダから見えるモノレールのレール。

十五年は前に見た夢である。私は計画が決まる数年前にモノレールを予知していた。マンションの二階の部屋は私と家族が住んでいた部屋で、夢の中では誰も住んでいなかった。生活感の無い、所々に瓦礫の破片が散った部屋で、空中を横切るレールも羽田のレールを見るように随分と薄汚かった。その夢の登場人物である私自身も随分と薄汚い恰好で、そして、物騒なモノを持っていた。

拳銃である。

もし、私が見た無数の夢の全てが予知夢なら、その後の私の人生はとんでもないモノになる。巨大な土偶の様な、八階建てのマンションを越すような意味不明の物体がマンションを破壊したり、何処か分からない極寒の惑星で捕らわれの身にならなければならない。幼い頃の夢であるから見た夢の殆どが突拍子が無い。

そんな夢の数々を両親、兄弟に汗ばんだパジャマのまま語り、インスタントコーヒーの湯気と共に笑ったものだった。

モノレールの夢もそうである。実際のモノレールはそのマンションから一キロは離れた所を南北に走っている。全く関係が無いとは言い切りたくないが、どこかでモノレールの噂を聞いたのだと解釈することは出来る。

気がつくと、私は大通りを歩いていた。今住んでいる場所より道が広い。やはり良い街だったのだと、十年前の記憶をほじくり返しながら考えた。

デジャ・ヴュの余波は未だに続いていた。おぼろげながら、この現在の続きが分かる。駅前のコンビニを見つめながら、あそこで肉まんを食べたと思い出す。

（次は）

夢の記憶を追いかけて空中を見上げるとスイミングスクールの看板。タツノオトシゴを象った淡い黄色と青。大通りから見ると赤煉瓦張りのマンションの影に隠れているスイミングスクールのガラス張りの淡い青が、ここへ通った数年を思い出させる。

（白と青のスクールバックと、スクール生を運んだバスの回想……）

デジャ・ヴュを知っている自分の感覚だけが宙に浮遊し、夢通りに思考し、思い出していく自分をぼんやりと観察していた。記憶の街であった街並みの、感激でぼやけた輪郭を見ながら地に足を着けて歩く自分を必死に確認する。

少し歩くと、左手の森閑とした、作られた公園の様なケヤキ並木の向こうに白と赤茶の横に長いビルが現れる。漢字が読めなかった頃にはその人の歩かない静けさに、様々に無害な想像を巡らしたが、今は『中小企業共同保養施設』の御影石に彫られた文字にその鮮やかでワクワクとしたファンタジーも霧散してしまう。

無残な言い方をすれば、確かにあそこは異世界なのだ。

しかし三つ子の魂にファンタジックな異世界は宿った。その鮮烈な印象は私の脳裏に焼きつき、街を離れた後でもしばしば私の夢に登場した。

「内藤、寝るな！」

部活の練習試合の時だった。前日の飲み会モドキの疲れから私は眠っていた。

極度の緊張と身体的疲れの中でのうたた寝である。隣の仲間の言葉から十分くらいの睡眠であった事が分かった。私は試合のせいではない冷や汗に気付いていた。瞬間的に夢を回想し、その謎めいた建物とケヤキの道を思い浮かべた。すぐに試合の順番が来ていることを知らされアップに入ったのだが、そのときにはすっかりその事を忘れていた。

その現物を見て、私は奇妙な懐かしさに捕らわれた。

足が止まっている。

歩き出すと、異世界は私から遠ざかっていく。冷静さが私の胃にどっしりとした重量感を持って居座り、次第に感激の痺れが消えていく。

確かにその十分の間に見た夢は鮮烈で私が見た夢の中でも傑作であった。その入った事すらない白と赤茶の建物の中に入り、書類を漁る。外部から遮断されたコンピューターにハッキングして、ファイルをダウンしていた。起きて、ニューロマンサーとインターネットの特集のせいだと瞬間的に気付いたが、夢はもう少し古風であった。黒光りする拳銃を持ち、姿の见えない追手から逃げていた。その立派なケヤキ並木が私を門へと導いていた。

映画一本分はありそうなイメージの集積であった。夢は瞬間に大量の情報を私たちに見せる。十分の間に数時間分の感覚を与え、一晚の眠りで一年分の印象を与える。どこか分からないカオス的なドロドロの中に沈んだ印象を瞬間的にすくい上げ、夢を見る者に分かるように組み上げる

。

ダーウィンの進化論と脳の解剖学の発達を背に受けて現れた進化学者エルンスト＝ヘッケルの痛烈な二元論的形而上学批判は、夢野久作に心理遺伝の着想を与え、夢野はそれをもとに奇跡の小説ドグラ・マグラを書き上げた。

作中で夢野は、胎児は胎内で生命誕生から人間までの進化の過程を追い、その何十億年にも及ぶ膨大な時のイメージを十ヵ月の夢で見ると言った。

瞬間に永遠を見る。それが夢である。

左手にグランドの防球ネットの緑色が見え、右手に何故か覚えているパプの看板がある。その忘れ切っていた名前に、私は、また痺れた。

この街は幻想の街だったのと気付いたのは六年ぶりの電話で親友だった人物と話した時だった。成人式の一ヵ月ほど前の電話で、こちらの成人式の二次会に参加しないかというお誘いの電話だった。随分と突飛な話に感じた。良く聞くと数週間前の飲み会でたまたま話題になり、あいつはどうなっているのかという話になったらしい。私には私の成人式二次会があることを同じ様な軽い調子で告げ、断った申し訳なさから古い話に花が咲いた。

小学生時代の連中から話が始まり、カラーボールで野球をした公園の話、学校の体育倉庫の裏から続く抜け道の話、近くのクリーニング工場から漏れる湯気の話。中小の工場が集中する地域であったから、幼い目に入り組んだ何かが飛び込んでくる。

煙突と湯気を放出するパイプの数々。機械の作動音と反復運動をする油染みた鋼鉄の物体。沢山のトラックの出入りする倉庫。背丈を越えるススキの密林とボロボロになったコンクリートの残骸。生化学業者の真新しい研究所。

電話の友人の声から私は本物以上に生々しい光景を想像し、また、その様な物体に想像力を逞しくしていった私の少年時代を思い出した。

少年時代の街だったと、私は友人に告げた。友人は残念そうに言葉を緩め、電話を切った。行きたいという気持ちは高まったが、爆発までには至らなかったのだ。今の友人の誘いを断ってまで昔の良き思い出の余韻に浸りたくはない。勿論、照れもある。何より、まだ思い出に浸るには若過ぎた。

チューイングガムの安っぽい匂いが私の鼻をついた。

青いトタンが現れ、その余りの懐かしさに身体が揺れる。忘れ切っていた駄菓子屋のたたずまいが眼前に姿を現した。大通りと交差する細い路地を一軒奥に行った所にある小さな店である。排ガスの匂いに厭きていた私の鼻が敏感に懐かしい匂いを嗅ぎつけ、視覚が灰色の中に青を捉えたのだ。

匂いの主はくじ付きのガムだった。ガムを包む紙に番号が書いてあって、いわゆる番号合わせになっている。商品は様々な種類があったが、スーパーボール、スーパーカーの消しゴム、誰かのブロマイドらしき物などといった所がメインだった。中には、当たりくじ自体が金券になる様なものもあったが、今になって考えてみると随分と法律的、教育的に危ういモノであったような気がする。

店を覗くと随分と様変わりしていた。知らない駄菓子が所狭しと並び、あの危うげな当たりくじも姿を消していた。ざらめの付いた紐飴だけが何故か健在で一つだけ買って店を出た。

みっともなく紐飴の尻糸にしか見えない紐を垂らしながら口に入れる。あからさまに合成されたストロベリーの味と香りが広がり、その粗雑な感触が妙に昔を思い出させる。

歩みが止まった。

赤信号である。大通りの南側の歩道を歩いて始めての信号なのである。ふと、時間が淀んだ。口の中でそう簡単には無くならない合成ストロベリーを転がして、横断歩道の分厚い白い塗装の剥がれをぼんやりと見ていた。

ふわっ、と短く切りそろえられた黒髪が視界に割り込む。背の丈は随分と低い。

車の流れが止まる。視線を上げると青信号。
視線を下ろすと黒髪は消えていた。

また、車が流れ始めた。

右頬の内側に張りついたストロベリー味の紐飴を舌で剥がして、口で転がした。

4トントラックが荷台をガタガタいわせて、黒い排気ガスを吐きだす。セダンが軽快な音をあげて交差点を曲がる。緑のツツジの植え込みが、車をバックに向こうの公園で浮き立った。花を摘んで蜜が有るとか無いとか騒いだ友達を思い出す。

また、流れが止まる。灰色のライトバンが残念そうに停止線を踏みつけ、自転車の子供が勢い良く飛びだした。

少し遅れて、やっと歩き出す。

私はそのデジャ・ヴュに似た感覚を脳裏で観察して、見覚えのある様な気がする黒髪の後ろ姿を思い出す。

誰だったのか。夢で見たのか、どこかで会ったのか。記憶の深淵で疼くその後ろ姿の印象をストロベリーと一緒に転がした。香りがレトロに私を包み込み、記憶と夢の記憶が混ざっていく。

低い背丈。やけに汚れた子供服。古風なおかっぱ頭。細い足首。

（誰だったか）

ストロベリー臭の空気の中を私の思考の触手が掻き分け、記憶の断片がたゆたう水面をぼんやりと泳ぐ。

閃光

一枚の記憶の絵。

薄汚れた一枚の書類。

記憶は現実の質量感に途切れた。目の前に十一年間通ったスーパーマーケットの建物が周囲を行き交う人々の春色の服と共に現れ、その思い出と、大量の人の顔と、様々な品物を白いコンクリートの中に閉じ込めて私を圧倒した。

「あの時は大変だったんだから」

「救急車が来たんだよね。あの車内だけは覚えているんだけど、どうやって店で倒れたのか覚えてないんだ。スプライトの瓶を持っていた？」

「そう、スプライトの、瓶だったんだよねあの時は。それを落として破片で上唇の上を切ったのよ。五針縫って結局傷が残ったでしょう？」

「これか」

「そう。覚えてない？傷があるんだから私の思い違いってことは無いと思うけど。」

「違うときに切ったとか？」

母は往生際が悪い私に首を振った。結局、幼児であるにも係わらず炭酸飲料の瓶とスナック菓子の袋を持っていた過去の私から、現在の私が欲深い人間であるという結論を導かれてしまった。幼児時代の記憶にも残っていない出来事を根拠に使われては堪らないのだが、傷だけは残っている。手鏡を突きつけられ、それと対面させられるとさすがにどうしようもない。記憶は無くても傷はあるのだ。

そのもう一つの証人を目の前に置いて、ふと、店に残っている人間はいないかと考える。数年前に終わった議論を回想して、残っていても覚えていないだろうと結論づける。記録ぐらいい残っていてもおかしくないが、あるはずない断言されても反論する気にならない。覚えているのは傷と母だけになる。

三百年前より、十年前の事が分からないような事はよくある。百数十年前の三月五日に坂本竜馬が何処にいたかを知っていても、自分が十数年前の三月五日に何処にいたのかを知らない。関が原の精密な地図と各大名の配置を知っていても、小学5年生時の運動会の勝敗を知らない。

どんな時間が私に近いのか。知らない時間と、間接的に知っている時間。知りたい時間と、どうでもいい時間。百数十年前の宿帳を見て、彼を見る。百年前は隣に存在し、十年は遥か忘却の彼方へ。あるのは絶対的な物理学的時間の隔たり。

容赦の無い時間の流れは、記憶の保有者を消していく。

夢野は作中で記憶は遺伝すると言った。心理遺伝と名付け、生物は何十億年の過去の記憶の連鎖に縛られているとした。夢による遺伝は祖先と個人を繋ぐとし、心理進化論とでも言える考えを著した。私はそれを読んでEPRの相関を想像した。より強い力学的関係を持った物体同士の時間を超えた量子的結合。夢野の考えは数十年たった今でも生きている様な気になる。

私は絶対的であるはずの時間の揺らぎを見る。近い時間、遠い時間。百数十年前の竜馬はすぐ近くにいて、十数年前の私は彼方にいる。十世代前の祖先が夢で重なり、そして……

信号が青になる。

真新しい塗装の横断歩道を渡ると、スーパーの入口がほんの目の前にやって来る。当然開かれていて、当然のように人が行き交う。私にとっては思い出の空間への入口である。入るにはディズニーランドへのゲートを潜るような気持ちが必要になる。

私は歩道を歩いた。ストロベリーが無くなっていた。街路樹と植え込みを隔てて向こうを走る車の排ガスを吸いながら、ちらほらと歩くおばちゃんやら、おばあちゃんやらとすれ違っていく。白に暖色のマークをあしらったスーパーの袋にネギやら、牛乳やらを覗かせて重そうに揺れている。

歩道は黒い。真新しい。排ガスの煤で汚れた白かったはずのガードレールをちらりと見ながら、記憶の中の光景と重ねる。

スーパーを取り囲んでいた奥行き十メートルはあった植え込みの帯が無くなっている。

気付かなかった自分に驚きながら、私は歩道が広くなったのか、店の壁が歩道側に競り寄ったのかを考えた。

（これが無かったのか）

ガラス張りの温室の様な細長い建物を細部まで眺めながら、思う。見ると花屋のようだ。その建築後五年は経っている古ぼけた材質の汚れを見ながら、自分だけに無い当たり前をじっくりと観察する。

植え込みの帯が無くなっているのはショックだった。幼いころ何度も駆け抜けた抜け道である。歩道と平行に走る事になるのだが、今思えば細い木々の間を抜ける行為に私はワクワクしていた。

日常的な異世界。全てはこの言葉に集約していた。私は沢山の小さな友達とその空間を駆け抜ける事で異世界を感じていた。ほんの数十秒の事である。何度も注意された。駐車場の入口に立つ警備員をチラチラと見ながら、私たちはその目を盗んだ。

警備員の立つ位置は今でも変わっていない。さすがに四十は超えているだろうと思える白髪の老人が、私の不躰な視線を不審気に見た。

レンガブロック張りになった植え込みのあった場所を一瞥して、視線を戻す。

綺麗なセミ・ロングが視界に飛び込んできた。

背が伸びた、そう感じた。

感じて……、感じてから、おかしいと我に返った。見たことが無い少女だ。十一才を越えているとは思えない背丈。服装も何処か周囲から浮いている。

（逆だ）

人込みに少女が消えそうになる。数十メートルは前へ行っている。歩速を上げると、周りの気配が変な顔をした。荷物の詰まった白いスーパー袋やら、手製の買物袋やらをよけながら進むと、少女が角を曲がる。見覚えのあるポプラの並木がその角から始まり、まだ繁げるまでに至っていない若葉が、初夏の毛虫と五月の消毒液の匂いを思い出させた。

私と家族が住んでいたマンションへ向かう方向である。

駆け出して、角を曲がると、また、背が伸びていた。ポニーテイルで、新品の学生服を着て

いる。また、後ろ姿。白いスニーカーがブレザーの黒に映え、鮮やかに遠ざかる。

マンションへと向かう小さい上り坂を駆け上がり、マンションを見据える。クリーム色だった外壁が白くなっている。下の自転車置場の青いプラスチック板の屋根が変わりなく古びていて、恐ろしいほどの懐かしさを感じた。

その時、

足元がグラついた。尻餅をつき、灰色に汚れたアスファルトに両手をついても頭を目茶苦茶に揺すられる様な激しい振動。

打った所が痛い。狂ったように揺れる大地に尻張りついてグチャグチャに倒れた自転車の列を見る。少女はいない。

揺れが止まる。止まって始めて地震だったと気付いた。

でかかった。十秒にも満たない様な強烈な揺れ。

黒いランドセルが転がっている。私と同じように転んだ少年がいて、生まれて初めてのことに目を白黒させている。買い物が帰りのおばさんが、転がったジャガイモを拾っていて、マンションの管理人がロビーから飛び出てきて、尋常でない目でマンションを見上げている。

（ひびか……）

確かに見える。いや、ひびというレベルではない。建物の構造的なズレである。数十センチはズレている。近づいて見上げると、錆びた鉄筋がネジ曲がっているのが見えた。エレベーター・ルームのガラスがメチャクチャに割れていて、破片が散っている。エレベーターは……動いている。

（そんな馬鹿な）

3階、4階、5、6、

どんと、昇る。訳が分からなくなってきた。

（上だ）

階段を登りはじめた。訳も分からず、全力で登りはじめた。真っ暗な階段を一段抜かしで登っていく。

瓦礫に足を乗せ、足からずれ落ちる。

したたかに打った膝の痺れを引きずりながら、ジンジンと痛む顎を摩る。左脚の筋肉がすぐに悲鳴を上げ、ザラザラの壁についた手のひらの皮が擦りむけてひりひりと泣く。

息が切れ、背筋が疲れてくる。脚は感覚が無く、手は血に塗れている。

瓦礫に躓き、暗闇に悪態を吐く。

4、5、6階、7階、

最上階。エレベーター・ルームで座り込み、辺りを見回す。当たり前のように誰もいない。何処からともなく入ってくる自然光に瓦礫がくっきりと照らし出される。

非日常的な光の入り方に上を見上げる気分にもなれず、薄緑色に塗装された鋼鉄のエレベーターの扉を見る。

2

薄黄色い表示ランプが2階を指している。

2階。

（あの部屋だ。）

考えるまでもなく、身体が反応する。階段を転げ降り、メチャクチャに打った頭を抱えて、また、駆け降りる。

心当たりがあるのだ。

夢？……違う。

予感？……違う。

沸き上がってくる全てを否定して、削げ落ちていく全てを無視して、自分の確信だけを頼りに泥に埋まった真実の像だけを捜し回る。泥に染まった手を顧みず、汗だくの頭のこぶを叩きながら探していく。

拳銃の黒光り。鮮明な赤。誰かの囁き。蓄えられた髭。そして、ボブカットの……

2階。

割れるように膝が痛い。頬を流れるのが血なのか汗なのかすら分からない。

動かない自分の全てを引きずって、私は走る。

ネズミ色の鉄ドアにぶちあたり、考えなしにノブを引く。

何の抵抗もなく開く。

重い軋み。閑散として誰もいない。剥き出しのコンクリートに土足で踏みだして、リビングに入る。

あった。

ベランダの柵を前に置いて横たわるモノレールのレール。

空中にまるでそれが当たり前の様にそこにある。

新品の、ビニールの包装紙がひっついていような鉄のレール。あれだけの地震にも耐え、その強靱さをピカピカの塗装に反射させているレール。

モノレールの本線から1キロは離れた場所にある路線。

(何だ？何で、ここにこんな……)

疑問に記憶が答える。物凄い勢いで記憶の無限的な連鎖が続き、溢れんばかりのイメージが脳がある場所で交錯していく。溢れる。

血。黒い軍用モノレール。次の地震。地震後の世界。拳銃。汚れた研究書類。ヨーコ。赤いジャケット。立体ホロの写真。誰かの囁き。廃墟に埋もれた私の家。ヒロシ。コンピュータとの接続。ナイフ。ボスのスキンヘッド。ボロボロのスカイライン。レトロちっくなオルゴールと、携帯食。

私は無限の意味の分からないイメージの連なりを掻き分け、真実の像を探る。

床の瓦礫。

泥の中の手に固いものが当たる。

目を上げると錆びたレール。

不意に扉が開き、声が聞こえる。

「早いわね」

「ああ」

私の声だ。視界に赤いジャケットを着た女が姿を現し、ミラーグラスを外して茶の瞳を見せる。

「書類は？」

差し出す。

（違う。差し出してはいけない。）

女が受け取り、私は安堵したような笑みを浮かべる。そうだ、仕事は終わった。これでみんな一緒に暮らせる。ヨーコも、タカシも、そして、美和子も……

銃声。

驚愕。血。醜く歪むヨーコの顔。

「さよなら、お父さん」

記憶が切れた。気がつくと、私は全身に冷や汗を浮かべて立ちすくんでいる。

振り向くと、ピカピカのレール。軍需工場へと連なる引き込み線。ガスを運び、何重にも封印した試験管を運んだ鋼鉄の道。

最悪の未来。全てを狂わせた地震。ヒステリックな政治家の顔。したたかに表層をネオンで飾った多国籍企業の看板。そして、私。

全てを思い出し、剥き出しになった像を見つめる。

（デジャ・ヴュ？）

違う。

（予知夢？）

（予知夢？）

違う。

違う、違う。

（逆？）

全てが逆流し、全ての事実が私の中で渦巻く。

……キオクの、コンランだ……

愕然としたイメージが自分の中にで荒れ狂い、恐ろしさが脚を這い上がって来る。全てが消え失せる消失感と足元のコンクリートの足場が崩れ落ちていく幻想が私を襲い、余りの怖さに、赤子の様に叫んだ、叫んだ、叫んだ。

コンクリートは全てを反射し、造られた世界が全てを反射し、私を強固に囲い込む。

頭を掻きむしり、素手で壁を殴り、血と骨を壁にこびりつかせて、半狂乱で叫び続けた。地団駄を踏み、泣き、喉が枯れるまで叫んだ。

私は見たのだ。記憶の深淵、私の全てが渦巻いた底で見たのだ。凄まじく恐ろしい私の全てを。タッター人の私を。

私は復旧した救急システムの賜物に運ばれながら、叫んだ。わめいた。断片的に全てを語り、全てを描写した。

湧き出る血の赤の鮮やかさ。

節くれ立った手を染めた赤の生ぬるさ。

服に染み込んだ赤のだらしなさ。

コンクリートで滲んだ赤の無意味さ。

どの赤も違うのだ。どの赤もそれぞれに違った赤。

そして、腹を撃ち抜かれるとどう感じるかと、感覚がいかに麻痺していくか。

ヨーコの事。美和子の事。タカシの事。私の家の事。黒のG T - Rの事。

私がどう殺されたか。心音が弱まっていく様子。血が抜けて軽くなった身体。

天国について、地獄について。

抜けていく力。薄れていく意識。動かない腕。動かない脚。絶望と安らぎ。

そして、その緩みきった、弛緩しきった微笑みで見る、

……最後の夢の、事を。

<了>